

ヨーロッパ現代音楽における 日本古典文学に取材した作品について

(要旨)

浅田 徹
(お茶の水女子大学 教授)

日本の古典文学は、世界の文化にどれほど影響を与えているのだろうか。たとえばどれだけの翻訳書が海外で刊行されているかという調査や、海外研究者の論文数もちろん参考になるだろう。しかし、もう少し違う視点からのデータがあってもよいのではないか。

この発表では、インターネット検索を中心として、日本の古典文学作品がどの程度ヨーロッパ(を中心とする)現代の作曲家たちの作品に素材を提供しているかを提示する。絵画や演劇については、国際的な検索は困難であるのに対して、現代音楽に関してはCDのかなり網羅的なサイトがあるために、一応意味のあるレベルの検索が可能である。それに楽譜出版社の在庫目録や作曲家たち自身のホームページを合わせて用いることで、今回のデータを作成した。

対象とするのは現在存命か、近年まで活躍していた作曲家の、おおむね 1980 年以降の作品とする。この範囲は、2021 年現在活躍中の作曲家たちが盛んに楽曲を発表するようになって以後ということで便宜的に定めたものである。ヨーロッパを中心としているのは、まずは検索の便宜ということによる。なお、日本人作曲家がヨーロッパ等で発表した楽曲は除いた。

そのようにして得られたのは 91 曲である。21 世紀になってもその生産は減少することなく続いている。地域的にはフランスで多いことは認められるが、作例は諸国に分布しており、十分広い享受を認めてよい。

それらを、素材となった作品の時代・ジャンル

別に分類すると、そのうち 75 曲もが「俳句」に基づくものであることが判明する。もちろん、古典作品の名前をすべて検索したわけではないので、これは「俳句」が検索しやすいということの結果かも知れないが、それにしても圧倒的な偏りである。また、特定の句に依拠するのではなく、単に特にまとまりのない断片的な印象を提示する短い曲を「Haiku」と称するという用法が定着していることもわかる。

俳句に基づく曲のテキストは、確認できた範囲では芭蕉や蕪村など江戸時代の俳人がほとんどである。彼らの作品が、現在の世界の音楽に少なからぬ影響を与えていることが実証できるのである。

俳句に次いで注目されているのは能である。数は少ないが、オペラの題材を提供した事例が多く、代表作とみられやすいジャンルだけに重要である。

能は既に世界遺産に登録されており、俳句も登録を目指していることを考えると、日本が世界に発信したい古典と、世界の注目とは一致しているとも言える。結局、ジャポニズムの時代以来の、「自然に対する小さな観察」と「簡潔で抑制された詩的な身振り」が今なお日本文化の特色として引き継がれているわけである。

アニメやゲームが世界に流通し、現代日本のイメージを作り上げているのはもちろん事実だが、古典文化が築き上げてきた国際的評価は、今も十分生きているのである。